

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

解説「保谷民博資料と本書収録の人名について」

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2021-07-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飯田, 卓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009822

解説「保谷民博資料と本書収録の人名について」

飯 田 卓

1975年、日本民族学協会附属民族学博物館（「保谷民博」）に収蔵されていた資料が、国文学研究資料館史料館（1972年までは文部省史料館、現在は人間文化研究機構 国文学研究資料館に統合）を経由して国立民族学博物館（以下「民博」）に移管された。このコレクションは、1910年代頃から1960年代に至るまでの半世紀間、さまざまな人たちの手によって集められた。本書は、このコレクションに関わった人たちの履歴をまとめた人名事典である。

収集の中心となったのは、財界人であり民族学者でもあった洪沢敬三である。本書に収録された人名のほとんどは、なんらかの意味で洪沢の知人だった可能性が高い。近親者もいれば、学生時代からの友人、実業の仕事を通じて知り合った者、学会活動をともにした者、研究で薫陶を受けた者、若手として洪沢から支援を受けた者たちなど、さまざまな人たちが関わっている。その多様な人たちの紹介記事を一冊にまとめた本書は、さながら、20世紀前半の民族学史と実業史をかいま見せる百科事典である。

コレクションの詳しい来歴については、同じく保谷民博旧蔵資料について編まれた報告書『財団法人日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）旧蔵資料の研究』（飯田 2017）。コレクションの詳細は同書に譲ることにして、ここでは、本書に関わる点だけをごく簡潔に述べておきたい。

保谷民博旧蔵資料と整理の問題

洪沢敬三が東京帝国大学に在籍していた1918年頃、彼が集めた博物館資料は、三田綱町（現在は東京都港区）にあった自宅の一角に陳列されていたというから、この頃すでに相当な量にのぼっていたのだろう。1921年頃には、仲間を集めて、収集物を持ちより整理する活動が本格化した。このグループは、アチックミュージアムともアチック・ミュージアム・ソサエティとも呼ばれたが、のちには前者の呼称がよく使われるようになった。しかし、自宅が手狭になったことから、洪沢は、コレクションとともにそれを収める建物や敷地を日本民族学会（1934年設立）に寄附した。このため学会は、1937年に附属民族学博物館

(以下「保谷民博」)を運営するようになり、1939年からそれを一般公開した。保谷民博は武蔵地域の保谷村(現在は西東京市)にあり、最初にコレクションが集まった三田綱町からは遠く離れていたため、移動後には資料の収蔵場所や資料間の位置関係が大きく変わって混乱をきたすおそれがあった。おそらくそのためだろう、移管の前後には、コレクションの大きな履歴整理がおこなわれた。

日本民族学会は、1942年に民族学協会(戦後は日本民族学協会)へと改組され、霊南坂(現在は東京都港区)にある民族研究所を支援する団体となった。このとき、博物館とコレクションの所属先があらためて検討され、またも大きな履歴整理がおこなわれた。しかしけっきょく、日本民族学協会がこれらをひき受けるかたちとなり、1943年に寄附手続きがおこなわれた(完了したのは1944年とする説もある)。場所の移動はなく、霊南坂の民族学協会が保谷のコレクションを運営するかたちをとった。1944年頃から1952年まで、戦争や戦後処理のために博物館は閉鎖されたが、戦後の活動再開に続く10年間、博物館は黄金時代を迎えた。しかし1962年、施設老朽化を理由として博物館は再び閉鎖され、戸越(東京都大田区)に新しく建てられた文部省史料館の収蔵庫にコレクションが運ばれた。これら2回の「移管」の前後にも、それぞれ大きな資料整理がおこなわれたようだ。なお、文部省史料館(1972年に国文学研究資料館の一部として改組)の時代、コレクションは公の場で展示されていない。民博が創設された1974年の翌年、まだ現在の博物館棟ができていない時期に、資料は民博のある大阪府吹田市へ移動した。

要約すれば、コレクションの所蔵者(保管者)は、①渋沢敬三個人およびアチックミュージアム、②日本民族学会、③民族学協会=日本民族学協会、④文部省史料館(国文学研究資料館史料館)、⑤民博と4回変わった。いっぽうコレクションの所在地は、①東京都港区三田綱町、②西東京市保谷、③東京都大田区戸越、④大阪府吹田市千里、と3度大きく移動した。この間、一部の資料は紛失したり、破損したために廃棄されたりした。

民博は、国文学研究資料館史料館から標本資料20,930点(28,432点から写真資料7,502点を減じた数)をひき継いだといわれているが、この数は目録の項目数から割り出したもので、じっさいに資料と対応させながら数えたわけではない。民博創設後に登録された資料は16,935点あるが、未登録のものも残っているし、目録中のどの項目に対応するのかわからない資料も多い。また、資料の数えかたが民博と以前の保管先とで異なるケースもあるので、民博がひき継いだ点数が何点にのぼるかは一概にいけないのが実情である(木村・吉田・横山2017)。

未登録資料の整理にむけて — 2つのデータベースの構築

民博がひき継ぎながら未登録のままになっている資料の整理は、喫緊の課題である。こ

の作業は、2000年頃になって民博の近藤雅樹教授（故人）が着手したが、近藤教授が現職のまま亡くなったため道なかばである。近年になって、彼の研究成果の一部が公開され、民博まで届けられながら未登録のままだった資料634点の履歴が明らかになった（朝倉・横山 2017）。しかし、素性のわからない資料はまだ多く、今後も履歴解明の作業を継続しなければならない。

今後の作業を進めるうえでもっとも大きな手がかりとなるのが、1950年代頃に整理された資料目録『民具標本収蔵原簿』（通称『保谷原簿』）である。この資料の原本は現在、神奈川大学日本常民文化研究所で保管されている。この目録は、コレクションを文部省史料館に移管するさい、資料すべてを列挙するべくまとめられたもので、収集当時の記録も比較的忠実に伝えている。しかしこれまでは、民具や物質文化の研究者でさえ、容易には目録にアクセスできなかった。資料の整理を進めるためには、16分冊（ただし未発見の分冊が存在する可能性もある）にわたってまとめられたこの目録を参照しながら、標本のひとつひとつにあたることが求められる。そこで、2016年度から2017年度にかけて民博が実施したフォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「日本民族学会附属民族学博物館（保谷民博）資料の履歴に関する研究と成果公開」では、保谷原簿の目録内容をデータベースのかたちで公開し、民博に登録された資料の管理情報もあわせて閲覧できるようにした。本書の刊行後、続けて公開される予定なので、読者が本書を手取る頃には見られるはずである。

じつをいうと、この『保谷原簿』をまとめた実務者（少なくともその1人）は癖のある字を書く人で、楷書体なのに判読しにくい文字があるほか、辞書にない独創的な字（誤記と思われる）も混じっている。したがって、ほんとうに『保谷原簿』の内容を示すためには、スキャン画像を公開するのがよい。しかしいっぽうで、個人情報も少なからず記されているため、すぐには公開できない。2年間のプロジェクトで作成したデータベースでは、著名な研究者や工芸製作者以外の人物名や住所などを伏せ字にした。

データベース公開のためにおこなったもうひとつの作業として、『保谷原簿』の「採集者」欄に現れる人名についての調査がある。その調査結果が本書となったわけだが、その内容はデータベースにも組みこんで、資料数の多さのためにデータベースにアクセスする意欲をユーザーが減退させることのないよう、効果的に表示できる仕掛けにする予定である。

2万点におよぶ資料情報のすべてについて、まんべんなく目を通す人はまずいない。多くの人たちは、特定の地域や時代に集められた資料に絞りこんで、どんな資料があるかを閲覧するのがふつうだろう。プロジェクトで構築したデータベースにはもちろんそのような機能もあるが、コレクションと関わった人物をひとりひとり紹介し、その人が集めた資料をすぐに見られるようにしておけば、同様に資料の絞りこみが容易かつ具体的になると考えた。そのほかに、コレクション情報を読みすすめると同時に情報検索をおこなうことで、コレクションの深い理解に寄与するという効果もある。

そこで、民博内外の研究者13名が分担して、『保谷原簿』の「採集者」欄に登場する個人493名と24団体のうち、325名の事蹟と24団体の活動、および、それらの人物・団体とコレクションとの関係を説明する「人名録」を編纂した。本書は、そのすべてを収録し、保谷民博のコレクション形成にどのような人物が関わったかを一読で理解できるようにしたものである。残る168名の素性などはいまだ調査中だが、これらの人名は「人名録」に続く巻末の一覧表にまとめた。

また、記述された人名解説は、データベース上において英語でも公開される予定である。20世紀前半の団体の英語名を確定する作業などは困難をきわめたが、現代日本史の研究者層の裾野を広げる意味では、この作業には一定の意義があると考え。ただし、さまざまな点で考証がゆき届いているのはあくまで日本語テキストであるし、まずは日本語での公刊が先決であると考え、本書には英語訳を収録していない。関心のある読者は、「保谷民博」および「人名データベース」で検索して見ていただきたい。なお、『保谷原簿』の内容を直接示した資料データベースのほうは、項目見出しだけ英語で表示されることになっており、内容のほうは日本語のままである。ご関心のある読者は、「保谷民博」および「資料データベース」で検索して見ていただきたい。こちらのほうは、英訳を予定していない。資料の名称など、現代日本ではほとんど用いられていないために、その意味を確定するために相当の労力が見込まれるためである。むしろ、先述したように、保谷原簿のスキャン画像を公開するほうが先決であろう。それに際しては、個人情報に関わる部分を伏字にするなどの作業が当然求められよう。

本書に掲載した人名

ただし、本書に登場する人名は、保谷民博コレクションに関わった人のすべてではない。『保谷原簿』をみると、「採集者」という欄のほかに「寄附者」という欄があって、そこには「採集者」の数よりもはるかに多くの人名が記されている。それにもかかわらず今回の作業で「採集者」欄だけにスポットを当てたのは、この欄に登場する人物こそ、アチックミュージアムや保谷民博と直接関わりつつ活動したと思われるからである。これに対して「寄附者」のほうは、民具の製作者や販売者などが多い。自分の意思で民具を集めた人もいるのだが、コレクションを博物館に収めるにあたっては、アチックミュージアム同人や日本民族学協会会員などを「採集者」として介在させて、民具を博物館に寄附している。つまり、複数の人物が収集に関わった場合には、アチックミュージアムや保谷民博に「より近い」人の名が「採集者」欄に記され、そうでない人の名が「寄附者」欄に記されているのである。

したがって、「採集者」欄に登場する人名のほうが、アチックミュージアムや保谷民博の

活動を知るうえでより重要といえるのだ。こうした人物が「採集者」と呼ばれた背景としては、1930年代当時、フィールドワークそのものが「民俗採集」と呼ばれたという事実を指摘してよいかもしれない。

「寄附者」欄は、たんに登場する人名数が多いという理由のほかに、プライバシーに関わるような問題が潜んでいるか予測できないという事情があるため、データベースでは原則として公開しないことにした。ただしこれは、あくまで暫定的な措置であって、研究の進展を図るうえでは将来どこかの時点で公開するのが望ましい。ある人物が資料Aの採集者になっていて別の資料Bの寄附者になっている場合、資料Aと資料Bは強い結びつきをもっていると考えられるからである。

その意味では、本書もけっして、網羅的な人名録とはいえない。しかし、300件を超える項目数は、保谷民博コレクションの全貌を知る第一歩としては、すでにじゅうぶんな分量だろう。本書はあくまで、人名録を完全に近づけるためのプロセスであり、ひいては、資料の性格を明らかにしていくうえでのプロセスにすぎない。本書をふまえて、保谷民博コレクションの理解と収集当時の社会状況の理解が進めば、本書の目的はじゅうぶんにはたされたといえる。

付記

本書では、各人の「事績」欄に登場する旧地名をできるだけ現地名によって補ったが、「コレクションとの関係」欄では集落レベルの特定しにくい地名が記載されていることがあるため、現地名を付記しなかった。また、「事績」欄の団体名に関しても、後継団体名を付記できていない場合がある。あらかじめご承知おきいただきたい。

事績に関わる参考文献はすべて掲載したが、『アチックマンスリー』『竜門雑誌』といった類出誌や新聞の記事は、紙数や労力の制約のために列挙できなかった。その他の単行本収録記事なども、ページ数などを細かく掲載できなかった場合がある。より詳細な情報に触れたい読者には、ウェブ上のデータベースを参照するようお勧めする。

本書は、国立民族学博物館がおこなったフォーラム型情報ミュージアムプロジェクト「日本民族学会附属民族学博物館（保谷民博）資料の履歴に関する研究と成果公開」（強化型プロジェクト、2016年度～2017年度）の成果である。

謝辞

本書を編纂するうえでは、以下の皆さまに貴重なご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。

愛知教育文化振興会様、李文雄様、江本嘉伸様、大本敬久様、岡田祐子様
刈田均様、耕三寺孝三様、清水亮一様、高山龍三様、全京秀様、永松実様
宮本千晴様、宮本瑞夫様、横山智之様（五十音順）

なお、本書中の記述に関する責任は、上記の皆様でなく各執筆者ならびに編者に所在します。

引用文献

朝倉敏夫・横山智之

- 2017 「保谷民博から民博に移管されながら未登録だった標本資料の履歴解明」飯田卓・朝倉敏夫編『財団法人日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）旧蔵資料の研究（国立民族学博物館調査報告 139）』pp.41-163, 吹田：国立民族学博物館。

飯田卓

- 2017 「本書の成立と保谷民博資料の来歴について」飯田卓・朝倉敏夫編『財団法人日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）旧蔵資料の研究（国立民族学博物館調査報告 139）』pp.3-13, 吹田：国立民族学博物館。

木村裕樹・吉田晶子・横山智之

- 2017 「保谷民博旧蔵資料の全容」飯田卓・朝倉敏夫編『財団法人日本民族学協会附属民族学博物館（保谷民博）旧蔵資料の研究（国立民族学博物館調査報告 139）』pp.15-40, 吹田：国立民族学博物館。